

学校名(香美市立香北中学校) 学校教育目標「自ら進んで学び、考え、行動することの出来る生徒(生きる力)を育てる」

項目	自己評価	中・長期経営目標	短期経営目標	主 な 取 組 内 容		取組内容の評価指標	達成状況	改善方策	学校関係者評価書	学校関係者評価
確かな学力	A	○学ぶ意味・意義を理解し、関わり合いの中で、自主的に学ぶ生徒を育てる。	①日々の評価や標準学力テストの結果などを効率的に生かして、どの生徒にも適切な指導がされている。 ②教師の授業の工夫のもと、生徒が意欲的に関わり合い、高まる競争をしあっている。 ③目標意識を高く持ち、家庭学習にも努力を重ねている。	学力向上のための組織的な校内研修体制づくり	○研究主任(各担当)主導の校内研の実施 ○生徒表彰ほか、評価の機会を増やすとともに競争心を高める。 ○香北の授業スタンダードの実践と検証を行う。	○研究目標に沿った授業が展開、計画に沿った評価がされ、改善策に生かされている。 ○分析がされ、授業改善に生かすことができる。 ○香北の授業スタンダードを取り入れた授業を全員ができている。	・研究主任が要となった研究推進体制がほぼ確立してきている。 ・全員実施する授業スタンダードを取り入れた授業研究も終わり、学期毎の個人反省を授業改善に生かせた。 ・教育事務所の月1回の訪問では授業参観を入れているが、授業の質、研究協議内容の質について高い評価を頂いている。	・香北の授業スタンダードを定着させ、生徒に示す授業の目標の質の向上やまとめの仕方に力を入れる。	・香北中としての授業スタンダードを全教員が共有し、研究推進体制が整い、実践できている。 ・授業の工夫等で、生徒は授業が分かるとの肯定的評価が90%以上できている。ただ、保護者の評価との間にギャップがある。保護者に理解を求めたい。 ・全国学力テストは、国語・数学ともに好成績であり、確かな学力がついていると思われる。 ・宿題の量が多いのに提出がよくできており、教員の指導を生徒がよく受け入れており、信頼関係ができている。 ・小中の合同研修がもたれ、共通理解が進んできている。できれば、教諭が小中お互いの授業を参観できる機会を設けたい。	S
				子どもにわかる授業づくり	○授業研の活性化と授業交流の日常化を図る。 ○小グループやICT機器を活用した、コミュニケーションのある授業実践を進める。 ○授業では、評価をもとにした改善サイクルを図る。	○小集団を使う等、生徒同士の関わりや言語活動を入れ、高め合う場面が設定されている。 ○各教科のシートが活用され、定期テスト等の評価に反映されている。(評定3未満の生徒30%以内) ○生徒の評価で「授業が分かる・授業の工夫をしている」と応える生徒が共に85%を超える。	・香北の授業スタンダードをもとに、「つながりタイム」を位置づけ、小集団等を活用するなど関わり合う授業を行うことができる。 ・各教科のシートは活用し、学力向上につなげることができた。2学期の評定3未満の生徒は、各学年でばらつきがあるものの全校で24%だった。 ・授業が分かると応えた生徒の割合は90.8%、授業の工夫をしていると答えた生徒の割合は、93.4%で向上している。	・つながりタイムのひな形の言葉を全教科で確認していく。 ・全教員による研究授業や生徒の評価評価アンケートを継続し、授業改善を行う。特に、思考力や表現力の向上を図る。		
				学校全体で予習・復習(宿題)の質と量を高める取組	○家庭学習・意識調査(年2回)で確認する。 ○予習・授業・復習のサイクル(黄金サイクル)が見える授業づくりを進める。 ○チェック表の活用及び検証を行う。	○宿題・自主ノートの提出率が95%を超える。 ○中1合宿研ほか、学習の手引を活用して学習の方法を徹底するとともに家庭の協力と理解を図りながら取り組んでいる。(教員アンケート) ○小中連携の中で共通課題について具体策が取られている。	・夏休み中の宿題などの未提出者は約15%だったが、冬休み後の未提出者は7%に減少した。 ・中1合宿で勉強の仕方などを確認するとともに、家庭訪問では学習の手引きを持参し保護者に理解を求めた。随時、「たより」をおした啓発を行ってきた。 ・夏の小中合同研修や月1回の合同管理職研修では、互いの学校の学力等の状況を確認することができた。取組の継続性を図ることができた。	・指導者は宿題を出すことを基本とし、提出については徹底した指導を行っていく。宿題の提出の確認は、管理職も入って継続した指導をしていく。 ・自主ノートで模範的なものは、生徒に紹介していく。		
豊かな心	B	○目標意識を持って、お互いを大切にしながら高めあい、汎用性のある社会人の基礎を固める。	①小中連携して人間関係づくりをすすめ、相互評価と高め合いができる。 ②道徳や人権学習・体験活動他を通じて規範意識が向上し、問題行動が少ない。 ③不登校や不登校傾向、人間関係を築きにくい生徒も含めて、お互いが思いやって共存できる集団となっている。	○日々のノートや生活日誌指導(言語活動の充実)を継続して取り組む。 ○忍耐力や精神力を育てる場面も意識して行事等に取り組む。 ○キャリア教育を充実させるために、ソーシャルスキルトレーニングの充実を図る。 ○学年懇談・個別面談・個別指導等を充実させ、あわせて情報の共有を図る。	○挨拶や礼、話し方などが高い意識を持って取り組める。(85%以上) ○梶ヶ森登山では、自己の体力に挑戦し、90%以上の生徒が難所を選択し達成する。 ○Q-U調査で要支援群生徒を0人にするとともに、意識調査で社会への貢献などの意識の高揚が読みとれる。(80%以上) ○道徳参観日を実施し、参加率30%以上にする。	・「挨拶」についての意識調査では、生徒、保護者、教員のすべてで肯定的評価が目標値を超えている。 ・梶ヶ森登山では、95%程度の生徒が難所を選択し、脱落者が一人でもなかった。 ・Q-U調査では、全校の要支援群生徒が5月は3名だったが11月は1名で0人にならなかった。 ・地域の活動に参加している生徒は70%だが、人のために力を尽くしたいと考えている生徒は86%で意識の高さが伺える。 ・道徳参観日は、2月の日曜日に延期した。	・Q-U調査の要支援群生徒は、5月と11月で全く同じ回答をしていた。具体的な対応を全教員で確認していく。 ・道徳参観日に向けて、たより等を使って家庭への呼びかけを行っていく。	・生徒会活動や諸行事、大きな行事である梶ヶ森登山などを通して、忍耐力や精神力が育ってきている。日常生活の中で、友人等を思いやる心を更に伸ばしたい。 ・キャリア教育が具体的に生徒に届いていない面がある。 ・地域活動への参加意欲が育っているので、その実施ができる機会を設けたい。 ・懸案だった日曜参観日ができた。道徳参観日としたことは、保護者にとってもいいと思う。 ・学校を休みがちな生徒への取組は、いろいろな方法でやられている。個に応じて引き続き努力を望む。 ・学校というコミュニティは、人間形成をする場である。人が生きていくうえで大切な人と人とのつながり、信頼関係を養う場として生徒を伸ばしてほしい。	B	
				○部活動では、早朝、継続的にランニングや運動を実施する。 ○5分間プログラムなど日々の授業や部活動の中で、体力・運動能力向上に向けて、仲間と共に心を通わせながら体を動かす取り組みを取り入れる。 ○各種調査の実施、分析をして、公表と啓発に努める。 ○健康・安全面の指導と、食育に努める。 ○キャリア教育とし、救急法や救助の方法などを通して貢献できる社会人としての心構えや技術を身につける。	○文化系部活も含め、早朝マラソンを実施している。 ○アンケートで体育が好きな生徒が90%以上にする。 ○新体力テストのD及びE評価の生徒を男女とも25%以下にする。 ○朝食を食べる割合を100%にする。 ○危機を想定した社会に貢献できる教育ができている。(避難救急訓練後のアンケート80%以上)	・文化部のなかでも早朝マラソンを実施することができた。 ・1年女子には体育が苦手な生徒が多いが、「体育の好きな生徒」は4月69%で9月末には93%に増加した。 ・新体力テストのD及びE評価の生徒は、男子は36%だったが女子は昨年の26%から6%と大きく減少した。 ・全国学力学習状況調査では、朝食を毎日食べる割合は95.7%で1名の生徒が朝食を抜く時があった。 ・2回目の避難訓練は3学期に予定。校内意見発表会代表者の発表内容に、震災と社会貢献に関係した内容の力強い意見が発表された。	・男子はほとんどの生徒が運動部の部活に所属しているが、新体力テストのD及びE評価の割合は例年と同じだった。体育の授業や部活動の指導を充実させ、意欲付けを図っていく。 ・食についての啓発を今後も継続していく。			
健やかな体	B	○将来設計の基礎である体力向上と安全教育、また、そのための、生活習慣のきちんと確立された生徒を育てる。	①体力と運動能力が全国平均に向上している。 ②日常生活を見なおし、健康や安全を意識して、良い生活習慣が定着している。	○部活動では、早朝、継続的にランニングや運動を実施する。 ○5分間プログラムなど日々の授業や部活動の中で、体力・運動能力向上に向けて、仲間と共に心を通わせながら体を動かす取り組みを取り入れる。 ○各種調査の実施、分析をして、公表と啓発に努める。 ○健康・安全面の指導と、食育に努める。 ○キャリア教育とし、救急法や救助の方法などを通して貢献できる社会人としての心構えや技術を身につける。	○文化系部活も含め、早朝マラソンを実施している。 ○アンケートで体育が好きな生徒が90%以上にする。 ○新体力テストのD及びE評価の生徒を男女とも25%以下にする。 ○朝食を食べる割合を100%にする。 ○危機を想定した社会に貢献できる教育ができている。(避難救急訓練後のアンケート80%以上)	・文化部のなかでも早朝マラソンを実施することができた。 ・1年女子には体育が苦手な生徒が多いが、「体育の好きな生徒」は4月69%で9月末には93%に増加した。 ・新体力テストのD及びE評価の生徒は、男子は36%だったが女子は昨年の26%から6%と大きく減少した。 ・全国学力学習状況調査では、朝食を毎日食べる割合は95.7%で1名の生徒が朝食を抜く時があった。 ・2回目の避難訓練は3学期に予定。校内意見発表会代表者の発表内容に、震災と社会貢献に関係した内容の力強い意見が発表された。	・男子はほとんどの生徒が運動部の部活に所属しているが、新体力テストのD及びE評価の割合は例年と同じだった。体育の授業や部活動の指導を充実させ、意欲付けを図っていく。 ・食についての啓発を今後も継続していく。	・体育が好きな生徒の割合が増加したことは、教職員の工夫や地道な努力の成果と思われる。 ・体力テストの結果が今ひとつ伸びていない。取組は困難な面が多いと思われるが、努力を期待する。 ・朝食を毎日食べて学校に来ているということは、家庭との協力体制がとれている。学校の方針に、家庭が賛同しているという結果で頼もしい。 ・成長期にある生徒は特に身体が資本となるので、食育、生活リズムを身につけることが必要である。食についての啓発は、生徒会活動でも取り入れてみたらどうでしょう。 ・避難訓練は“人の為に尽くしたい”と考えている生徒が、いざという時、活動できる基となる。繰り返し、基本的な訓練ができるよう望む。	B	
				○生徒が人間性豊かに成長するための条件整備を共にに行い、お互いが成長しあう関係を築く。	①学年世話人・地区委員との連携が図れている。 ②保護者の意識改革と交流が深まっている。 ③家庭学習の充実に保護者や地域も協力的である。	○保護者の参加を高めるための、保護者が企画、運営する行事の設定。(日曜参観日…父親との交流など) ○夜間懇談会の実施、日常の家庭訪問、アンケート等の実施。 ○家庭への情報発信(たより、学校HP、携帯サイト)を充実させる。 ○家庭での学習チェックほか、協力の要請をしながら啓発を図る。	○保護者の理解・協力のもと教育活動が進められたか。 ○家庭や地域に情報発信(毎週の学年通信、毎月の学校だより、学期に1回のPTA広報、HP、携帯サイト)が抜かりなくできたか。 ○たよりや面談を通して家庭学習の充実を図ることができたか。	・2月16日に日曜参観日を予定し、保護者の方にも事前に案内を行った。 ・PTA活動も積極的に行われ、梶ヶ森登山を始め多くの行事で協力頂いた。 ・たよりやHP等を使い広報活動を積極的に行うことができた。	・開かれた学校をすすめるために、常に複数の方法により取組の情報発信を行う。	・いろいろな方法で、学校に対する保護者の理解を得る工夫がされている。が、保護者の「学習した内容が定着している」と感じている率が低い(55%)ことについて考える必要がある。 ・保護者からは、携帯サイトの利点を生かして、イベントや緊急情報の発信を増やしてほしいとの要望がある。 ・学校からの情報発信は、きめ細かくできている。 ・地域に対しては、教頭先生が毎月、地域をまわって便りを配布し、地域の実情を知り、保護者の話に耳を傾けるなど努力には頭が下がる。
特別支援教育	A	○特別支援教育の理念を理解し、生徒間の交流を増やし、お互いを尊重し合える集団作りと、将来の社会生活にも生かせる、行動化できる生徒を育てる。	①特別支援教育の専門性を共有し、個に応じた的確な教育がなされている。 ②日常生活を見なおし、生活の中に見られる矛盾や不合理をなくしていくとす意欲が育つ。	○小中連携の下、情報の交換や生徒の交流を図る。 ○各種の障害に関する理解と対処方法などの研修を深め、共通理解を図り取り組みを進める。 ○職員会では、生徒理解の内容を必ず入れ、職員間の共通理解を図る。その際、本校担当のSCやSSWIにも可能な限り参加してもらい、専門的な見地からのサポートをもらう。 ○ボランティアの精神を学び、貢献できる社会人としての心構えや技術を身につける。	○小中の情報交換と課題の共有が図れたか。 ○特別支援教育に焦点をあて、スーパーアドバイザーを招聘した校内研修(事例研究)が実施できたか。 ○職員会では生徒指導を必ず入れ、SCやSSWIに参加してもらったか。 ○かかわりあう関係を仕組むことができたか。	○小中の情報交換と課題の共有が図れたか。 ○特別支援教育に焦点をあて、スーパーアドバイザーをお迎えして、校内研修を行えた。 ・SCやSSWを加えた職員会を実施できた。毎朝の職員会や職員会では生徒理解の場で生徒の状況や対応を確認してきた。 ・意図的に人間関係づくりを取り入れた授業を行うことができた。	・小中の情報交換を管理職だけでなく、校内特別支援コーディネーターを含めた連携をすすめていく。 ・人間関係づくりの研修を校内研修に含め、教員のスキルを高めていく。	・小中の情報交流が定期的になされ、共通理解のもと、個に応じた取組がなされている。 ・特別支援教育学校コーディネーターなどの活用が度々、生かされている。 ・来年度入学の児童へのアプローチができている。 ・教職員が授業での指導・学力向上のスキルを身につけるだけでなく、人間関係づくりを重視した取組に力を入れていく姿が見られた。更に力を入れた学校教育を期待する。	A	